
天界喫茶

響月柚子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天界喫茶

【Nコード】

N1288R

【作者名】

響月柚子

【あらすじ】

細い路地裏にひっそりと存在する、小さな喫茶店「天界喫茶」。一歩足を踏み入れれば、其処には不思議な世界が広がっていた…。

その日僕は、珍しく寄り道をした。

普段なら決して立ち寄らない、奥まった細い路地にある小さな喫茶店。

キツカケは何気なく目に留まった看板だった。

「天界喫茶…？今流行りのメイド喫茶やら執事喫茶みたいなヤツか…？」

古ぼけた看板にたった一言、『天界喫茶』ただそれだけ。

普段なら全く目にも留まらないだろうそれが、何故かとても気になる。

誘われるようにその小さな店に足を踏み入れる。

「いらっしやいませ〜」

ドアに付いた鈴が、カランコロンと店の人間に来客を知らせる。

それに気付いた店員が、パタパタと音を立ててやってきた。

…其処までは、よかった。

内装も少し女の子向けな可愛らしい印象を受けるが、至って普通の（少し古い感じはするが）喫茶店なのに。

「1名様ですか〜？お席にご案内しますね」

店員さんも、可愛い。

文句なしで、可愛い。

…なのに、何で。

「こちらへどうぞ〜」

ニコニコと微笑む可愛らしいその少女は、とても自然にパタパタと羽音を立てながら宙に浮いていた。

(え、え?! ちょ…何?!)

背中から不自然に生えた、真っ白な翼。

その両翼が、少女を虚空へといざなっていた。

「ちよつとアンジェ! お客様置いてきてどーすんのよっ!」

「…アレ? いっけな〜い! ごめんねルサタちゃん!」

「私に謝ってないで、早く戻りなさい!」

「は〜い!」

そのまま店の奥まで消えていった少女は奥で別の店員らしき女性に怒鳴られて、慌てて僕の方へと戻ってきた。

「すみませんお客様〜!」

「い、いえ…僕の方こそ、すみません…」

あまりの出来事に呆然と立ち尽くしてしまつて、少女の案内に付いて行かなかつたのは自分だ。

彼女が謝る必要はない。

そう思い思わずそう謝ると、少女はきよとん、と小首を傾げこちらを見つめてくる。

(う…か、可愛い…)

日本人離れた長い金髪、大きな空色の瞳。

澄んだ高めの声は、まるで小鳥のさえずりのように心地いい。

背中に生えた白翼さえなければ、普通に可愛い女の子、なのに。

(…いや、可愛さは普通じゃないけど)

そんなことはまあこの際どうでもいいとして。

少し休憩に入ったのだから、とりあえず席に案内してもらわなければ。

「…あの、席…」

「あっ! すみません、今ご案内します〜!」

おずおずとそう切り出すと、少女ははつと我に返ると、早々に店の奥へと誘導を始めた。

その後適当に注文したメニューを完食した僕は、ふう、と満足のため息を吐いた。

「普通に美味しかったな…」

僕が席に着いてから目にした店員達は皆天使のような羽根を生やしていて、まるで漫画やゲームの世界に自分一人迷い込んだような錯覚をしてしまいそうだ。

（新手の制服か？…にしてはリアルな…）

けれど接客や味は普通のお店以上で、僕は思わず頬が緩んでしまう。

「空いてるお皿、お下げしてもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。ありがとうございます」

先程の少女がそう言って、小皿とカップを手に取る。

そして慣れた手付きでそのままキッチンへと戻っていく。

その後ろ姿を見ながら、僕はさて、と席を立つ。

「…そろそろ帰るか」

名残惜しいが、もう日暮れ時が迫っていた。

「お会計お願いします」

「あ、はい！只今伺います！」

レジでその声を掛けると、奥の方から低めの凛々しい声が響く。

そしてしばらくして、先程とは違う少女がペコリとお辞儀をしてやってきた。

紫紺の短めの髪が印象的な、しっかりしていそうな少女だ。

（さっきの子とは随分感じが違うな…って！）

少女の背中には真っ黒な翼とアニメで時々見る矢印型の尻尾が、大きく存在を主張していた。

「ありがとうございます。…お客様のお会計、856円で御座います」

「は、はい…！」

それは俗に言う、悪魔だった。

流石に怖くなって、僕は会計を済ませると早々に店を出た。

「ありがとございました〜」
遠くで響いた声が、嫌に耳に残っていた。

「ふ〜…さっきはびっくりしたね、ルサタちゃん」

「ホントよ…だってまさか、人間の客が来るなんて」

少年が出ていった店内、彼を接客した二人の店員は、安堵のため息を付けていた。

「でもおかしいのよね。この店、普通の人間には見えないはずなのに。彼、潜在的に魔力でも持ってたのかしら」

魔族の少女の言葉に、神族の少女は反論する。

「え〜、もしかしたら神通力持ってたのかも！」

「それはないっしょ…神聖な力なんて、微塵も感じなかったもの」

アレ、あんま近くで浴びると後で大変なのよね〜、と、魔族の少女はボソリと愚痴を零す。

「それを言ったら魔力だつて、アテられたら大変なんだよ？」

「ま、お互い様よね。…とにかく、彼は今後要注意人物、かな。店長にも伝えとかないと」

「そうだね。…まあ、彼がこの店のことを誰かに言っても、誰も信じないだろうからそれは心配ないだろうけど」

二人の少女はそう言うと、少年の去ったドアを見つめる。

今日はもう、客が来る様子はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1288r/>

天界喫茶

2011年9月1日08時30分発行